

編集室

* 5月末から編集理事を担当しております。本原稿締切が6月初めですので、今回は、私自身が本会を通して学んだ幾つかを紹介して編集後記にしたいと思います。

* 学生時代は異なる専攻分野でしたので、私が本会に入会したのは、25年前の社会人になってからでした。企業の研究員が学会で発表する意義としては、“自分の組織の成果としてのアピールを行うとともに、学会の場において研究者自らの提案を問い、その位置付けと意義を確認すること、成果を自由に外部に発表できる場を持ち、関係研究分野の発展に具体的に貢献するには、まず入会することが必須。”という上司の勧めで入会しました。

* 年に2回開かれる「全国大会」（現在は総合大会・ソサイエティ大会）に初めて投稿したとき、他の学会に比べ予稿集が充実していて、1論文B5判1ページ分の分量に驚かされました。三〜四つの図面を軸に、ストーリーを考えて主張点を絞り、相手に的確に伝わるようにまとめることや、様々な質疑応答を通して、大きな声で相手のポイントに短い時間で過不足なく答えることなど、様々なことを学んだように思います。何回か発表していくうちに、自らの発表のレベルを確かめ、様々な企業や大学と組織を越えて研究成果を競う場として本会に興味を持つようになってゆきました。

* 本会は、今では、五つの技術分野のソサイエティ・グループから構成され、ソサイエティ・グループ全部合計すると80近い常設の研究専門委員会と30近い時限の研究専門研究会が活動主体として組織されています。各研究専門委員会では、年間を通して、個々に企画・開催している「研究会」という独自の研究発表の機会があり、参加するだけであれば、誰でも無料で聴講できます。更に、予稿集を買えば1件当たり6ページの詳細な学術情報を得ることができます。このような外に開かれた議論の場は、本会特有の貴重な場ではないでしょうか。

* 私が社会人になった頃は、インターネットも検索エンジンもまだ普及していなかった時代でした。全国大会や研究会、それらの予稿集は、社会人になってから通信分野を本格

的に勉強し始めた私にとって、日本語でまとまった話を聴講し、関連分野を俯瞰することができるありがたい存在でした。そのメリットは今でも変わっていないように思います。また、論文でしか知らなかった著名な研究者の講演を聴き、直接質問することで、研究内容のみならずその研究スタイルやオーラ？に直接触れることができ、得られることも多々あったように思います。もちろん、各地方で開催される「全国大会」や「研究会」では、行ったことのない地域に行くというオプションな魅力もありました。

* 入会してしばらくたった頃、初めて産学官からの様々な分野の専門委員からなる研究専門委員会の幹事団として、研究会を主催する立場で参加する機会に恵まれました。全国大会のプログラム編集や、年間を通して日本全国で開催される研究会の企画・論文募集・運営を行う中で、会社組織以外の様々な分野の方々と知り合うことができ、人脈が広がったように思います。また、長期的なプロモーションが必要な新しい研究テーマの立ち上げに際して、第二種研究会としてシンポジウム等を企画・開催することで、少しずつ関心を持つ方々を増やし、大きな技術トレンドに育ててゆく営みの大切さと楽しさを、OB委員及び専門委員、参加される会員の皆様から教えて頂いたように思います。

* 現在では、電子情報通信に関連する国内・国際学会も増え、インターネットを介して様々なグローバルな電子文献情報を自在に検索することができる時代になっています。電子ジャーナル化はグローバルな学会再編を起こし、本会もそのような時代の波に合わせて、学会としての独立性を保ちつつ会員サービスを充実していくことが求められています。本会では、このような状況に対処するために、本年4月から、本会の持つ論文・学会発表等の文献情報を自在に検索可能な検索システム「I-Discover (IETICE Knowledge Discovery)」を一般に公開しました。今後、会員の皆様の利便性の向上に役立っていくと期待しています。皆様に広く御活用頂くことで、今の時代に合った形で進化・発展させ、少しでも学会が会員の皆様にとって価値あるものになるよう尽力したいと思います。今後ともよろしくお願いします。

(編集理事 宮本 裕)